おうむの王さま

文：花岡大学　　絵：前田晃宏

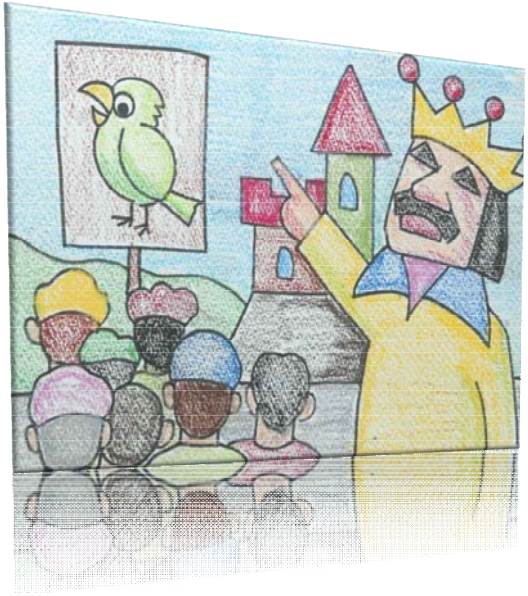
むかし、インドのある国にな、けったいな王さまが、おってんと。

　なんでけったいなのかと、いうたらな、その王さまは、三度三度の食事に、「鳥の肉」を食べんことには、しんぼうでけへんと、いうのやって。

　それに、その「鳥の肉」はな、どんな鳥でも、ええちゆわけには、いかんのやそうや。

　おうむという鳥が、おるやろが。

　人のことばを、うまいこと、まねしよるやつや。
あの「鳥の肉」やないと、あかんというのやと。



　おうむの肉が、そないに、うまいのかどうか、そらしらんけども、よしんばその肉が、とびきり、うまいにしてもじゃな。

おうむの肉やないといかんと、勝手にきめて、ほかの「鳥の肉」はいらんやなんて、ぜいたくぬかすなと、いいたくなれへんか。

　なるやろが。

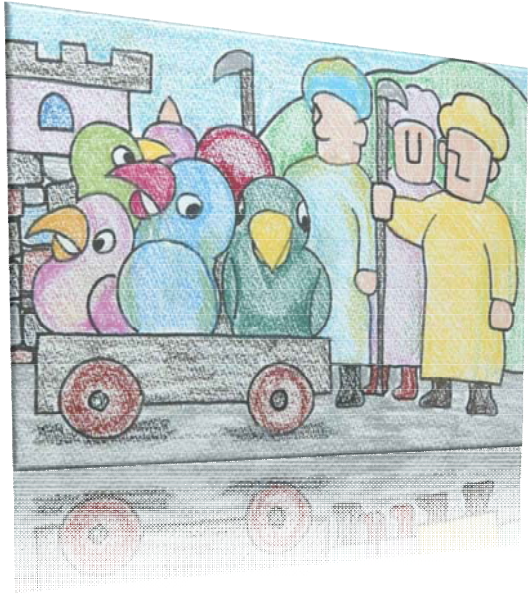
　どんなむりなことをいうても、いうたとおりにしてもらえるもんやと、思いこんどる、こんな王さまは、わしは、大きらいや。

そりゃまあ、なんでも、いわれたとおりに、「へい、へい。」と、してやるけらいどもも、いかんけどもな。

　それでな、けらいどもは、「おうむを、生きたまま捕えて、ごてんへ、もってこい。たかいねだんで、いくらでも、買いあげてやる。」という、ふれを国中にだしてんと。

　そして、ほんまに、びっくりするような、たかいねだんで、買うてくれたんやって。

　そやもんやから、かりうどたちは、まるで、きょうそうみたいに、おうむさがしに、山へでかけ、えさをまきちらし、あみをつこうて、生け捕りにしてな、つぎからつぎへと、ごてんへ売りにきたんやと。



　ごてんは、おうむで、いっぱいこや。

　鳥かごみたいなもんでは、まにあわんので、こまかいさんをうちつけた、にわかづくりの鳥小屋をこさえて、そこでこうてたそうや。

　なにせ、毎日三度の食事に、ださんならんし、王さまに、あたらしい肉を、食べてもらうためには、そないして、ぎょうさんこうておかんことには、まにあえへんもんな、えさをやるだけでも、えらいこっちゃって。

　さて、えらい長うなったけど、ここまでは前おきで、話はこれからや。

　話は、じつはな、小屋にいれられとる、おうむたちのあいだにおこった出来事でな。

何んでもないこっちゃけど、まあ聞けや。

おうむの王さまが、おってんと。

今まで、うまいことにげまわっとったが、ある日、とうとうつかまってな、ごてんの鳥小屋へ、ほうりこまれたんやって。

ほうりこまれて、王さまは、ちょっと、びっくりしたそうや。

なんでかいうたら、中につかまっとるのは、みんな自分の家来たちで、今までなら、王さまがきたというたら、ぺこぺこして、かしこまつとったのに、もうしあわせたように、つんとして、だれひとり、あたまをさげる者も、おらへんだからや。

そればかりやない。

しばらくするとな、小屋のなかへ、どさっと、えさが、なげこまれたが、なげこまれるといっしょに、小屋じゅうはな、まるではちの巣をつついたみたいに、大さわぎになり、ふんだり、けったり、つついたりしてのう、えさのうばいあいが、はじまったんやって。

えさが、たりないからとちがうのや。

そないに、けんかせんでも、あまるほどあるのに、ちょっとでもよけいに、食べようとよくばっての、みにくいあらそいや。

そればかりやない。

またしばらくするとな、その日ころして料理する、おうむをつかまえに、ごてんの料理人が、小屋のなかへ、はいってきてんと。

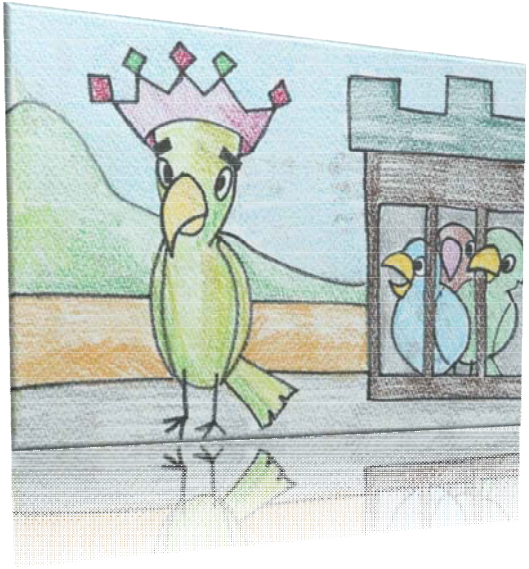
そしたら、それこそ、えらいこっちゃ。

みんなは、自分だけは、つかまらんとこと思うて、ほかのことなど、どうでもええのや。なんとも、いいようのないこえをあげて、せまい小屋中をにげまわるのやって。

まるでじごくやがな。

　そのようすを、じっとみとった、おうむの王さまは、さわぎがしずまると、みんなに、こないにいうてんと。
「なにも、あんなに大さわぎをして、にげまわらなくとも、料理人が、つかまえていくのは、おまえたちのうちの一ばんようこえとるものらしい。そらそやろ。
肉が一ばん多いのやからな。えさも、たっぷりくれるのは、わしらを、ふとらせるためや。ふとりさえしなかったら、ころされるしんぱいはない。
どうやみんな。そのためには、ちょっとくるしいけども、えさを食べんと、からだをやせさせようやないか。
それに、うんとやせたら、小屋のさんとさんのすきまから、そとへにげだすこともできる。
わしは、今から、えさを食べんことにする。おまえたちも、そうしないか。」

　すると、みんなはつめたく笑ってな、
「なにを、ねぼけたことをいうとるのや。
どないに、あばれても、ここからにげだすことはでけん。
どうせころされるにきまっとるのやもん、腹いっぱいに、食べるだけが、たのしみや。王さまや思うて、えらそにぬかすな。
ここでは、王さまもくそもない。
やせたかったら、かってにやせるがええわい。」
　と、いうて、だれも、いうこと聞けへんでんと。



おうむの王さまは、ひとりで食をたった。

なんにも食べんのやから、日に日にげっそりやせていった。

まもなく、みるかげもないほど、身体がちいさくなると、ある日みんなのみている前で、小屋のさんとさんのあいだから、そとへぬけだし、おどろいているみんなに、心をこめて、
「よくばりは、牢屋であり、毒であり、刃であり、それが命をうばうのだ。早くそれをすてて、小屋からぬけだしてきてくれ。山でまっているぞ。」
というと、朝日に羽を光らせながら、気持よさそうに、とびさっていってんと。

そのことばは、小屋のなかのおうむたちの心に、針のように、つきささったそうや。

それからどうなったか、わしゃしらん。

けども、どやな。
このおうむのことば、みんなの心には、なんともないかい。

え、どやな。

お　し　ま　い